

写本『葡日辞書』における「y」の使用

岸本 恵実

1. はじめに

ヴァティカン図書館所蔵の写本『葡日辞書』⁽¹⁾の日本語表記は、日本イエズス会式ローマ字綴りにほぼ準拠している。しかし例外として、他のキリシタン資料にはあまり見られない「y」の表記が多数用いられている。本稿では、規範から逸脱したこの表記について、編者のポルトガル語表記との関係と併せて考察したい。

2. 『葡日辞書』のローマ字綴り

辞書本文の日本語の綴りは、基本的に『日葡辞書』(1603 本編・1604 補遺刊)などに見られる、日本イエズス会式のローマ字綴りを踏襲している。

<短音節>

[ア]a	[イ]i, j, y, y	[ウ]u	[エ]ye, ye	[オ]uo, vo
[カ]ca	[キ]qi, qui	[ク]cu, qu	[ケ]qe, que	[コ]co
[ガ]ga	[ギ]gui	[グ]gu	[ゲ]gue	[ゴ]go
[サ]sa	[シ]xi	[ス]su	[セ]xe	[ソ]so
[ザ]za	[ジ]ji	[ズ]zu	[ゼ]je	[ゾ]zo
[タ]ta	[チ]chi	[ツ]tçu	[テ]te	[ト]to
[ダ]da	[ヂ]gi	[ヅ]zzu	[デ]de	[ド]do
[ナ]na	[ニ]ni	[ヌ]nu	[ネ]ne	[ノ]no
[ハ]fa	[ヒ]fi	[フ]fu	[ヘ]fe	[ホ]fo

<長音節>

[ワウ]uô
[ヲウ]uô
[カウ]cô
[コウ]cô
[ガウ]gô
[ゴウ]gô
[サウ]sô
[ソウ]sô
[ザウ]zô
[ゾウ]zô
[ツウ]tçû
[タウ]tô
[トウ]tô
[ダウ]dô
[ドウ]dô
[ヌウ]nû
[ナウ]nô
[ノウ]nô
[ハウ]fô
[ホウ]fô

[バ]ba	[ビ]bi	[ブ]bu	[ベ]be	[ボ]bo		[バウ]bō
						[ボウ]bō
[パ]pa	[ピ]pi	[プ]pu	[ペ]pe	[ポ]po	[プウ]pū	[パウ]pō
						[ポウ]pō
[マ]ma	[ミ]mi	[ム]mu	[メ]me	[モ]mo	[ムウ]mū	[マウ]mō
						[モウ]mō
[ヤ]ya, ya	[ユ]yu, yu		[ヨ]yo, yo	[ユウ]yū, yū	[ヤウ]yō, yō	[ヨウ]yō, yō
[ラ]ra	[リ]ri	[ル]ru	[レ]re	[ロ]ro	[ルウ]rū	[ラウ]rō
						[ロウ]rō
[ワ]ua						

<拗音短音節>

[キャ]qia	[キョ]qio
	[ギョ]guio

<拗音長音節>

[キユウ]qiū	[キヤウ]qiō
	[キョウ]qeō
[ギユウ]guiū	[ギヤウ]guiō

[シャ]xa	[シュ]xu	[シヨ]xo	[シユウ]xū	[シャウ]xō
				[ショウ]xō
[ジャ]ja	[ジュ]ju	[ジヨ]jo	[ジュウ]jū	[ジャウ]jō

[チャ]cha	[チヨ]cho	[チュウ]chū	[チャウ]chō
			[チョウ]chō
[ヂャ]gia	[ヂヨ]gio	[ヂユウ]giū	[ヂャウ]giō
			[ヂョウ]giō
		[ニユウ]nhū	[ニャウ]nhō

[ヒャ]fia	[ヒャウ]fiō
---------	----------

[ビュウ]biū	[ビャウ]biō
----------	----------

[ピャ]pia

[ミャ]mia	[ミャウ]miō
---------	----------

[リヨ]rio

[リュウ]riū

[リャウ]riō

[リョウ]riō

[クワ]qua

[クワウ]quō

[グワ]gua

[ン]n,~(鼻音符),m

[ッ](入声語尾)t

(促音)-cc-, -cq-, -pp-, -ss-, -tt-, -xx-

しかし、『葡日辞書』には規範とは異なる表記もある。用例数が多いものとしては、ジチズツの四つ仮名のうち、「zzu」とあるべきところを「⁽²⁾zu」と書いた例だけが極端に多いこと、才段長音の開合符号の誤りと省略、などがあるが、今回は他のキリシタン資料の日本語表記に用いられることのごく稀な、『葡日辞書』の最も特徴的な表記である「y」を採り上げて、その使用状況を見ていきたいと思う。

3. 「y」の表記

3. 1. 他資料の「y」表記

「y」が『葡日辞書』の中でどのように用いられ、何を意味しているのかを考える前に、同時代の資料における使用例を見ておく。

「y」という表記自体は、16-17 世紀の他の欧語資料にも見られる。まず刊本では、17 世紀に入ってから⁽²⁾のキリシタン版に、イタリック体の連続活字「y」が用いられている。これはラテン語の「i」(長音)や、日本語などの「ij」の二字を表している。

Ordinary & Parochi, (『サカラメント提要』(1605 刊)f.151; ラテン語)

Motomumaj y toki. (『日本小文典』(1620 刊)f.34; 日本語)

また写本では、同時代の資料であるローマ・イエズス会文書館所蔵のイエズス会士自筆書簡(上智大学キリシタン文庫所蔵写真)を見たところ、管見の範囲ではラテン語書簡ではいくつかの例が見られたものの、ポルトガル語ではごく少なく、使う人物も限られていた。これらは「ji」「i」の音を表すのに用いられている。

Igrejnsa(=Igrejica)(Jap.Sin.15.f.109v アフォンソ・デ・ルセナ; ポルトガル語)

Fimey(=Fimeji, 姫路)(Jap.Sin.17.f.289 ジョバンニ・バッティスタ・ボロ; 本文ポルトガル語)

ÿrmão(=irmão)(Jap.Sin.5.f.177 ダミアン; 本文日本語)

confessary(=confessari, 但し i は長音)(Jap.Sin.34.f.199v ベドロ・カスイ; ラテン語)

Juny(=Juni, 但し i は長音)(Jap.Sin.37.f.16 バルタザル・トレス; ラテン語)

また「˘」を使ったものとしては、他に「i」「e」「a」「o」が見られた。

que quer sair(Jap.Sin.38.f.44v フランシスコ・パチェコ；ポルトガル語)

coemimus(Jap.Sin.34.f.199v ペドロ・カスイ；ラテン語)

spandade(Jap.Sin.38.f.47 フランシスコ・パチェコ；ポルトガル語)

proal(Jap.Sin.16 I.f.237v アフォンソ・デ・ルセナ；ポルトガル語)

「˘」は現代ポルトガル語でも *trema*（分音符）として用いられている符号である。現代語では、例えば *frequentar*[fɾekwɐ̃ˈtaɾ]のように、前の強母音と二重母音を構成せず、母音接続となる *i,u* に付けられる。16-17 世紀はポルトガル語正書法の確立していない時代であったが、上の書簡の例から「˘」は母音に付けるものという意識は当時から存在したことがわかる。「y」もこれらと起源を同じくする表記と考えられるが、これ以上はポルトガル語史の問題に広がるため、本稿では『葡日辞書』の「y」のみに絞って論ずることとする。

なお、写本類には「y」（*y*字の上に点一つ）という表記もある。これはイエズス会士の書簡にも多数見られ、「y」と区別なく用いられているようである。

meyo(Jap.Sin.7 III f.74v ガスパル・ピレラ；ポルトガル語)

muytas cousas(Jap.Sin.18 I f.7v ジョアン・ロドリゲス・ツツ；ポルトガル語)

「y」は、イエズス会士マヌエル・バレット自筆であるバレット写本では日本語の表記にも用いられており、これについては後述する。

以上より、

(A) 16-17 世紀当時、「y」は刊本・写本に用いられていたものであり、『葡日辞書』独特の表記ではなかった。

(B) 写本では他に類似表記として、母音に「˘」を付したのものや、「y」という表記が見られる。

の二点がわかった。次に、本資料での用法を見ていくことにしよう。

3. 2. 『葡日辞書』の「y」表記

3. 2. 1. 日本語における「y」の用法

『葡日辞書』の日本語表記中、「y」は 206 例ある。（但し、ポルトガル語例文中の *miyaco* 1 例、*yedo* 2 例を含む。）その用法はさまざまに分かれており、分類すると以下のようになる。

ヤ行音

ヤ *y*a

limar algua couza.<ものをヤスリで擦る> monouo yasuride suru.（物ヲ鋸デ擦ル）

(35v-a10)

ユ *y*u

Ter paciencia.<耐える> Canninsuru.（堪忍スル） corayuru.（堪ユル）(60r-b15)

ヨ *yō*

nadar.<泳ぐ> *uoyogu.* (泳グ) (51r-a2)

エ *ye*

Pintura.<絵> *ye.* (絵) (73v-a16)

連母音

アイ *ay* (1例のみ)⁽⁴⁾

Peixe crú.<生の魚> *namayuo.* (生魚) (67v-a7)

イイ *iy*

mandar.<派遣する> *Tçucauas.* (遣ワス) *iytçucur.* (言イ付クル) (39r-a14)

ウイ *uy*

laya.<種類> *Ruy.* (類) *Taguy.* (類) (34r-a16)

単母音イ *y* (1例のみ)

Estado. Estada.<居ること> *y.* (居) (21r-a18)

イヤ *ya* (1例のみ)

Desdanho.as.ar.<侮辱する> *yaximuru.* (卑シムル) *sagueximuru.* (蔑シムル) (7v-b7)

3. 1. で見た他資料の「*y*」と比較すると、(a) ~ (c) のようである。

(a) 「*yrmão*」のようにイの音を表す用法は共通している。

(b) 「*Motomumajy*」「*Fimey*」のように「*ij*」「*ji*」に置き換えられる例は『葡日辞書』には見られない。

(c) ヤ行音・エ・連母音を表す用法は、『葡日辞書』に独特のものである。

したがって『葡日辞書』の「*y*」の用法は、他資料とはかなり異なる独自性の高いものであるといえよう。

『葡日辞書』の「*y*」の用法別用例数は、<表3>のようになる。語頭とそれ以外の区別はほとんどみられない。

<表 3>

用 法			数 (語頭)
ヤ行音	ヤ	ya	7 7 (4 1)
	ユ	yu	2 8 (1 3)
	ヨ	yo	4 0 (2 7)
エ		ye	3 7 (6)
連母音	アイ	ay	1 (0)
	イイ	iy	2 2 (1 5)
	ウイ (グイ以外)	uy	2 (1)
	グイ	guŷ	6 (0)
単母音 イ		y	1 (1)
イヤ		ya	1 (1)

ヤ行音に対して共に用いられている「y」と「y」には、何か用法に違いがあるのだろうか。『葡日辞書』での「y」は、次のように用いられている。

ヤ行音 ヤ ya・ユ yu・ヨ yo (用例は多数のため省略)

エ ye (用例は多数のため省略)

連母音

イイ iy

Desculpo.as.ar.<弁解する> togauo iyfarasu. (科ヲ言イ晴ラス) (7v-b2)

ウイ uy (1例のみ)

ligumes.<豆類> Azuqi, mame nadono taguy. (小豆、豆ナドノ類) (35v-a1)

単母音イ yi

Entorto,as.ar.<ねじる> yigamuru. (歪ムル) Cagamuru. (屈ムル) (17r-b8)

イヤ yia

Patife.<卑劣な者> yiaxij mono. (卑シイ者) (65r-a1)

『葡日辞書』での「y」と「y」の用例数を、先の<表 3>と合わせて示すと以下のようになる。

<表 4>

用 法			y の用例数 (語頭)	ȳ の用例数 (語頭)
ヤ行音	ヤ	ya / ȳa	1 5 5 (9 2)	7 7 (4 1)
	ユ	yu / ȳu	9 8 (5 8)	2 8 (1 3)
	ヨ	yo / ȳo	1 8 0 (1 4 0)	4 0 (2 7)
エ		ye / ȳe	1 1 0 (2 6)	3 7 (6)
連母音	アイ	— / aȳ	—————	1 (0)
	イイ	iȳ / iȳ	1 3 (1 2)	2 2 (1 5)
ウイ (グイ以外)		— / uȳ	—————	2 (1)
	グイ	guȳ / guȳ	1 (0)	6 (0)
単母音 イ		yi / ȳ	3 (3)	1 (1)
イヤ		ȳia / ȳa	4 (4)	1 (1)

「y」と「ȳ」には、次のような違いがある。

- (1) 「ȳ」は連母音アイを表すのに用いられるが、「y」は用いられない。⁽⁵⁾
- (2) 「ȳ」はグイ以外の連母音ウイを表すのに用いられるが、「y」は用いられない。
- (3) 単独の母音イの綴り方の違い (「yi」 / 「ȳ」)。
- (4) イヤを表す綴り方の違い (「ȳia」 / 「ȳa」)。

の四つである。(1)～(4)から、「y」は、「i」と組み合わせて連母音イイ・単独のイを、「ia」とでイヤを、「gu」とでグイを、というように、他の文字と組み合わせた時にしか母音イを表せないのに対して、「ȳ」は単独でイを表せることがわかる。すなわち、「ȳ」は「y」よりも母音イに近いという意識が編者にあったのである。

なおこの他、「ȳ」で表される音のうち、「y」だけでなく「i」「j」を用いても表される音がある。「i」「j」「y」「ȳ」の四字の使い分けは、<表 5>のようであった。これによると、「j」は連母音イイ「ij」以外に用いない、「i」はヤ行音やエに用いない、など、編者には「i」「j」「y」「ȳ」を使い分ける意識がある程度あったと考えられる。

<表 5>

	i	j	y	ÿ
ヤ行音 (ヤ・ユ・ヨ)	×	×	○	○
エ	×	×	○	○
連母音 アイ	○	×	×	△
イイ	○	○	○	○
グイ以外のウイ	○	×	×	△
グイ	○	×	△	○
エイ・オイ	○	×	×	×
単母音イ	○*1	×	△*2	△
イ段音 (キ・シ・チ…)	○	×	×	×

「○」－用例あり、「×」－用例なし、「△」－用例はあるがごく少数

*1 yi 1例も含む。 *2 yi 1例のみ。

しかし「ÿ」と「y」に関しては、使い分けのある(1)～(4)は用例が少なく、それ以外の違いはほとんどない。さらに注目されるのは、同じ語に対して「ÿ」と「y」の両方が用いられている例が多数あることである。しかもこのうち、両形がごく近い箇所に用いられている場合も多い。

「uoya」 / 「uoÿa」

o pai, ou o filho.<親か、子か> uoyaca, coca.(親カ子カ) (59r-b11)

Parecese com o pai.<親に似ている> uoÿani nita. (親ニ似タ) (62r-b11)

「iytcuqe」 / 「iÿtcuqe」

mandado.<命令> iytcuqe. (言付ケ) guioi. (御意) /

mandado do Senhor.<主人の命令> xũno iÿtcuqe. (主ノ言付ケ) (39r-b15,16)

用例とその数を分類すると<表 6>のようになる。

<表 6>

ヤ	(y>ỵ) (y=ỵ) (y<ỵ)	山(13>7)、病(12>4)、遣る(7>6)、早(8>2)、親(7>2)、 石火矢(3>1)、茶屋(3>1)、速い(3>1)、和らぐる(3>1)、 過ち(2>1)、誤る(2>1)、鰯(2>1)、瘦する(2>1)、止む(2>1) いや(4=4)、没薬(1=1)、やがて(1=1) 約束(3<5)、役(3<4)、柔らかい(3<4)、焼く(1<5)、弓矢(1<3)
ユ	(y>ỵ) (y=ỵ)	言ふ(22>9)、変ゆる(4>2)、許す(5>1)、押さゆる(3>1)、露(2>1)、 故(2>1)、 弓(2=2)、生ゆる(1=1)、調ゆる(1=1)、
ヨ	(y>ỵ) (y=ỵ) (y<ỵ)	良い(40>7)、より(助詞)(17>6)、様(12>3)、酔ふ(10>2)、 強い(7>3)、夜(9>1)、泳ぐ(3>2)、喜ぶ(3>1)、清むる(2>1) 横目(1=1)、迷ふ(1=1) 四(2<7)、依つて(1<2)
エ	(y>ỵ) (y=ỵ)	へ(助詞)(13>7)、家(8>5)、前(8>5)、江戸 ⁽⁶⁾ (7>2)、枝(6>3)、 覚え(6>3)、上(5>3)、絵(5>1)、末(3>1) 見える(2=2)、無塩(1=1)
イイ	(y=ỵ)	言ひ(＋付くる・過ごす・掛くる・晴らす・開く・直す・ 渡す・様、物言ひ)(15=15)
ウイ	(y<ỵ)	^{タグイ} 類(1<6、他に tagui 1 例あり)
イヤ	(y>ỵ)	卑し(－い、－むる)(5>1、他に iyaxime 1 例あり)

*動詞の名詞形は動詞に含めた。

全体として「ỵ」よりも「y」を多く用いる傾向がある以外、編者はかなり恣意的に「-」を付しているようである。上のように同一語での用例が多数あることからすると、編者には「ỵ」と「y」について母音イに近いかどうかという意識の差はあったものの、明確に使い分けるほどではなかったことがわかる。

3. 2. 2. ポルトガル語における用法

『葡日辞書』では、日本語だけでなくポルトガル語でも「ỵ」が用いられている。ポルトガル語中の「ỵ」は 37 例ある。

Pra^{ỵ}a.<浜；現代語 Praia> fama. (浜) (78v-a18)

laca^{ỵ}o.<従者；現代語 lacaio> Cachino mono. (徒ノ者) (32r-a10)

上のように、現代ポルトガル語で ia, io と綴る語の i の位置に「ỵ」が用いられている例が多い。この他、以下のような例もある。

me^{ỵ}ado.<半分の；現代語 meado> (44v-a11)

o sangue sa^{ỵ}e quieto. Corre quieto.<血が静かに出る、流れる；現代語 sai> (87r-a1)

用例数をまとめると、＜表7＞の通りであった。

＜表7＞

現代語	用例数	用 例
io	2 5	laca $\ddot{y}$ o, corre $\ddot{y}$ o, me $\ddot{y}$ o, papaga $\ddot{y}$ o, ga $\ddot{y}$ ola, ue $\ddot{y}$ o, ga $\ddot{y}$ o, ra $\ddot{y}$ o
ia	7	la $\ddot{y}$ a, me $\ddot{y}$ a, pra $\ddot{y}$ a, bo $\ddot{y}$ a $\ddot{o}$
(a)	2	me $\ddot{y}$ ado
i (e)	3	sa $\ddot{y}$ e
計	3 7	

「 $\ddot{y}$ 」は現代語において「i」で表される語が 37 例中 32 例であり、現代語との違いは考慮せねばならないが、『葡日辞書』の編者は、日本語だけでなくポルトガル語においても母音「i」に近い音であるとの意識を持っていた可能性が高い。しかし＜表7＞の語のうち、3. 2. 1. の日本語の場合と同じように、同一語内で「y」と「 $\ddot{y}$ 」の二通りの綴りで書かれている語が7語ある。これらは並記されている場合も多い。したがってポルトガル語においても、「y」と「 $\ddot{y}$ 」にはっきりした使い分けの意識はないといっ

よいだろう。

Me $\ddot{y}$ o.＜半分＞ fanbun.（半分）/

me $\ddot{y}$ o dia.＜半日＞ finaca.（日中）/

me $\ddot{y}$ o cate.＜半カテ＞ fangu $\ddot{i}$.（半斤）/

me $\ddot{y}$ o reino.＜国の半分＞ fangocu.（半国）(44r-b4~7)

「y」と「 $\ddot{y}$ 」の両方が用いられている7語の用例は全て、＜表8＞の如く「y」が「 $\ddot{y}$ 」の同数又はそれ以上になっている。また、『葡日辞書』のポルトガル語全体における「y」と「 $\ddot{y}$ 」の使用数を見ても、「y」55、「 $\ddot{y}$ 」37となっており、「y」の方が多い。

＜表8＞

現代語	y	$\ddot{y}$
boi $\ddot{a}$ o	boya $\ddot{o}$ 1 =	bo $\ddot{y}$ a $\ddot{o}$ 1
laia(s)	laya(s) 3 >	la $\ddot{y}$ a 1
meia	me $\ddot{y}$ a 4 >	me $\ddot{y}$ a 3
meio	me $\ddot{y}$ o 15 >	me $\ddot{y}$ o 13
papagaio	papagayo 1 =	papa $\ddot{y}$ ga $\ddot{y}$ o 1
praia	praya 2 =	pra $\ddot{y}$ a 2
veio	ue $\ddot{y}$ o 5 =	ue $\ddot{y}$ o 5

上のような同一語内の「y $\geq$ $\ddot{y}$ 」という傾向は、＜表6＞で見た日本語の場合でもほぼ同じであった。

例外的に「y < ỵ」となっているのは、「柔らかい」「役」「約束」「焼く」「弓矢」「四」「依つて」「類^{クグイ}」の8語である。これらのうち「類^{クグイ}」については、「ỵ」の方が「y」よりもイに近いという意識があったためと考えられる。あとの「柔らかい」「役」「約束」「焼く」「四」「依つて」は全て「y」「ỵ」が語頭にくる語であり、「弓矢」のやも「弓」と「矢」の複合語と考えれば語頭と考えられる。『葡日辞書』のポルトガル語では「y」及び「ỵ」を語頭に用いた例はないので、「y」よりも「ỵ」を多く用いている語に関しては、日本語のみの特例と見なしてよい。

つまり、ポルトガル語でも日本語でも、「y」と「ỵ」とはほぼ区別なく用いられ、「ỵ」よりも「y」の方が多く用いられる傾向があることが確かめられる。別の視点から見れば、編者のポルトガル語の綴り癖が、日本語を綴る場合にも同じように現れているということである。

ここで、3. 1. で言及した「ý」について、再びふれておきたい。バレット写本の日本語表記に用いられている「ý」は、例えば「xy (シ)」のようにイ以外のイ段音を表すのに用いられている点が『葡日辞書』の「y」と異なるが、ヤ行音・母音イを表すなど共通点が多い。豊島(1982)は、計算機によるデータ処理の結果、この「ý」は何か特別な音を表しているのではなく、通常の欧語の表記においての「y」「ý」「i」の使い分けが、日本語表記にも反映しているのではないかと推察している。この、書写者の欧語を綴る時の傾向が日本語の表記にも反映したという考え方は、『葡日辞書』における「y」と「ỵ」にも同じように当てはまるのではないだろうか。

4. まとめ

ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』に見られる「ỵ」の表記は、16-17 世紀の刊本・写本資料にも見られるが、その日本語表記の用法はこの辞書に独特のものであり、さまざまな音を表すのに用いられている。

『葡日辞書』の日本語表記において「ỵ」の果たす機能は、「y」と重なる部分が多い。「ỵ」と「y」の違いは、「ỵ」は単独で母音イを表せるのに対して、「y」は他の文字と組み合わせた時にしかイを表すのに用いられていないという点であり、したがって編者には「ỵ」の方が「y」よりも母音イに近いという認識があったと考えられる。『葡日辞書』でイ音を表す文字は「i」「j」「y」「ỵ」の四つがあり、編者はこの四つを使い分ける意識がある程度あったようである。

しかし、日本語でもポルトガル語でも、「y」と「ỵ」の表記が同一語を表すのに用いられており、またどちらの場合も「y」が「ỵ」よりも多く使われる傾向がある。すなわち、「y」と「ỵ」は音の違いを表しているというより、編者のポルトガル語を綴る時の書き癖が、日本語の綴りにも反映していると考えるべきである。これは、バレット写本に

おける「y」と「ý」の関係とも類似している。

『葡日辞書』では、「ý」の例から、ポルトガル語正書法が確立していない時代において、編者のポルトガル語表記の傾向が日本語の表記に対しても影響力を持っていたことが明らかになった。キリシタン資料のうちでも、刊本に比べて個人的な傾向を反映しやすい写本資料では、そのローマ字で表記された日本語について考える時、日本語の音韻の問題としてとらえるだけでなく、書写者のポルトガル語表記の反映をも考慮せねばならないのである。

<注>

(1) 『葡日辞書』からの引用は、高田時雄氏所有のマイクロフィルムを元にさせていただいた。以下の引用において、(2r-a2) は f.2 の表・左側 2 行目からの引用を表す。v は裏、b は右側を表す。また < > 内に見出しのポルトガル語訳を、() 内に漢字・カタカナによる日本語の翻字を補った。下線は筆者が適宜付したものである。

(2) 拙稿(1998)参照。

(3) 富永(1978:69-77)参照。

(4) 「生魚」は「生」と「魚」の複合語であり、アとイのつながりは例えば「相手」や「貝」ほどは強くないので、単独のイの例に入れるべきかもしれないが、形として連母音となっているためここに入れた。

(5) 注(4)で述べた通り、「生魚」は 1 例しかない連母音アイの例として適当でないかもしれないことを注記しておく。

(6) 「yedo」の綴りは、巻末の書簡(91v)にも 1 例見られる。

<参考文献>

岸本恵実(1998)「ハ行四段動詞アウの発音」『国語国文』67-8

富永牧太(1978)『きりしたん版文字攷』天理時報社

豊島正之(1982)「バチカン図書館蔵バレット写本『サントスの御作業』に於ける y と ý との使い分けに就いて」『言語研究の中の計算機』計算機利用言語学研究会

(きしもと えみ・本学文学研究科博士後期課程)